

# 黄門の漫遊

## 水戸藩と飯高寺

### 匠探訪

24

「水戸黄門の漫遊」を寸劇にしたいので、飯高寺などを訪ねた様子を教えてほしい、と尋ねられました。

水戸黄門はおよそ3百年前の人で、水戸（茨城県）藩の第2代藩主でした。初代藩主頼房（よりふさ）は徳川家康の11男で、その3男が光圀（みつくに）です。

水戸家の藩主は、他の大名のように参勤交代はなく、江戸にいて將軍の補佐をするのが原則でした。副將軍というのも正式なものではなく、水戸藩主の特別な立場から生まれた呼び名とされています。

光圀が飯高寺などを参詣したのは、1695年（元禄8年）正月のことでした。この時光圀68歳、藩主を譲り西山莊（茨城県常陸太田市）に隠居していましたが、前年（元禄7年）5代將軍綱吉に御前講義をし、水戸への帰り道に下総の諸社寺を参拝したのでした。

正月16日に水戸藩邸（東京都文京区小石川）を一行360人ほどが出発、20日に飯高寺や飯高神社などを訪れ、そのとき整備されたのが「池田堤」といわれています。水戸への到着は、出発から8日目の23

（こと）であるものの、明治になつて『水戸黄門仁徳録』が出版され、歌舞伎や講談などで演じられ評判になつたとされます。

黄門は1700年に72歳で亡くなりますが、すぐに伝説が広く知れわたるようになつたとされ、没後50年を経たころから家臣らによつて逸話集などがまとめられたそうです。

先に紹介した元禄8年の飯高寺参詣のほか、飯高寺の記録では、元禄11年と翌12年にも光圀が同寺に来たことになつていきます。しかし、光圀と行動を共にすることの多かつた日蓮宗僧日乗（にちじょう）の日記からもそのころの光圀は体調を崩し外出を控えていた様子がわかります。飯高寺の記録は、水戸藩と寺とのつながりの報告書のような内容で、光圀没後100年後に書かれています。

飯高寺への3度の参詣説や「黄門桜」の背景には、当時広く知れわたつていた『水戸黄門漫遊記』が影響を与えたことも考えられます。

『黄門の漫遊』に、こつしした史実を加えると楽しみが増すかも知れません。

岡八日市場図書館 ☎73・3746



県道佐原八日市場線から妙福寺へとつながる道路「池田堤」。水戸黄門が飯高妙見宮（現在の飯高神社）参詣の際に2本造らせたうちの1本と伝わる。もう1本も近くにあったはずだが現存しない

日でした。ところで、「水戸黄門漫遊記」はいつごろ生まれたのでしょうか。最近の研究によると、黄門の漫遊がフィクション（作り